62 少林山達磨寺と建築家ブルーノ・タウト

11月の終わり、群馬県内の紅葉の見納めとして、紅葉の名所でも知られる高崎市の少林山(しょうりんざん)達磨寺(だるまじ)の景色と歴史を堪能してきました。

縁起だるまの少林山

少林山は、上毛かるた「縁起だるまの少林山」で群馬県人には有名ですが、その境内で建築家のブルーノ・タウトが2年3ヶ月暮らしていたことを初めて知りました。

少林山達磨寺のホームページ（ブルーノ・タウトのことも詳細に書かれています）
https://www.daruma.or.jp/

今から200年ほど前、天明3年に浅間山の大噴火などの天変地異が多く起こり、大飢饉となってしまいました。この惨状を見かね、生活の苦しかった付近の農民救済のため9代目の住職東嶽和尚は、開山心越禅師の画かれた「一筆達磨坐禅像」をもとに木型を彫り、張り子のだるまの作り方を豊岡村の山縣友五郎に伝授しました。そして正月七草大祭の縁日に掛け声勇ましく縁起物として売られるようになったのが縁起だるまの始まりです。

縁起だるまの特徴は、まゆ毛は鶴が向かい合い、鼻から口ひげは亀が向かい合った鶴亀の顔で、顔の両側には家内安全や商売繁盛などの願いごとが記され、お腹には大きく福入りと書かれているため、縁起がいいことから縁起だるまと呼ばれています。

そして群馬交響楽団の創設、群馬音楽センターの建設をした井上房一郎を招いたこともここで知りました。境内の達磨堂には全国各地のだるまの展示や福田赳夫、中曽根康弘、小渕恵三各氏の選挙当選時に使っただるまなども展示されています。

少林山達磨寺縁起

室町時代末期より碓氷川の南側、鼻高村の高台には行基菩薩が彫られたとされる四尺ほどの厄除・子授け・縁結びにご利益のある観音様を祀る小さな観音堂がありました。

延宝（１６７３～１６８１）のある年のこと、大雨が降り碓氷川が氾濫したことがありました。水が引けた頃、村人が川の中をのぞきこむと黒光りした大きなかたまりが流れついていたので、引き上げてみると香りのする大きな古木でした。村人たちは霊木として観音堂に納めることにし、観音像の前に安置すると、不思議にも紫の霞がたなびいたので皆はよいことがある前兆であると喜びました。

洪水があった頃、全国を廻る一了居士という行者さんの夢枕に達磨大師が立たれ「この私の像を彫りなさい、彫る木は鼻高にある」とおっしゃいました。延宝八年（1680）、一

了居士は鼻高を探しあて、村人に夢枕の話をすると、それなら観音堂に納められた霊木のことだろうと村人が案内すると、一了居士はひと目でそれが達磨大師のお告げの木であると判り、涙を流して喜びました。

一了居士は、沐浴斎戒（身を清めて、肉・魚・酒や臭いのきつい野菜などを絶つこと）をして、心をこめて一刀三礼（一彫りごとに五体投地の礼拝をすること）の最高の彫り方で見事な達磨大師の坐禅像を彫りあげました。しかし観音様を降ろして厨子（仏像を安置する堂の形をした仏具）に安置しようにも大きすぎて納められず困っていると、大雨がありまた大きな木のかたまりが流れつきました。それを使って一了居士が厨子を彫ると、ちょうど達磨像が納まったので観音様の隣に安置されました。

この信心を凝らして彫られた達磨大師の像は村人たちの評判となり、この観音堂のあたりはいつともなしに“達磨出現の霊地”として「少林山」と呼ばれる用になり近隣に広まりました。その頃の領主・酒井雅楽頭忠挙公は厩橋城（前橋城）の裏鬼門を護る寺として、水戸光圀公の帰依された中国僧・東皐心越禅師を開山と仰ぎ、弟子の天湫和尚を水戸から請じて、元禄十年（1697）少林山達磨寺（当時：曹洞宗寿昌派）を開創しました。

享保十一年（1726）水戸徳川家から三葉葵の紋と丸に水の徽章を賜い、永世の祈願所とされました。

ブルーノ・タウトと少 林 山

少林寺にはブルーノ・タウトの業績や彼が作った工芸品やイスなどが展示されており、ブルーノ・タウトの建築家としての素晴らしさと日本文化に感動していたことがよくわかりました。

ブルーノ・タウトは1880年ドイツの東プロイセン・ケーニヒスブルク生まれ。建築学校卒業後、当時流行ったジャポニズム、アールヌーボーに影響され、日本に関心を持ちました。結婚後、ベルリンで建築設計事務所を開きましたが、ナチス政権の台頭により、身の危険を感じたタウトは妻と共に日本に亡命しました。1933年敦賀に到着。翌日桂離宮を訪れて深い感銘を受け、伊勢神宮では自然と調和した簡潔なそして厳しい形式に共感しました。また、建築家に連れられて全国を旅し、多くの文化人や工芸家に接し日本の文化を深く理解して行ったのです。

タウトは1934年8月から2年3ヶ月のあいだ少林寺に滞在しました。ある日、タウトが散歩していた時のエピソードが日記に残されています。

私たちが山下の小径を歩いていると、いつものように大勢の村童たちが私たちのあとからついて来たが、やがて私たちの歩く先に立って両側の潅木の枝を左右に押さえつけ、枝の先が私たちに触れないようにしてくれた。外人を見ようとする好奇心はあっても、実に細かい心遣いをするものだ。みな貧しい？それも極めて貧しい子供たちなのに！　やはり日本なのだ。

（昭和10年3月24日の日記）